

## 研究ノート：役割語と「属性表現」の検証

—アニメ『魔法少女まどか☆マギカ』を用いて—

小松満帆（立教大学）

### Verification of Role Language and “Attribute Expressions”

Maho KOMATSU (Rikkyo University)

キーワード： 役割語、属性表現、アニメ

Keywords : role language, attribute expressions, anime

#### SUMMARY

This paper will verify the definition of ‘attribute expressions (*zokusei hyogen*)’ proposed by Nishida(2010), which is the linguistic expressions manifest the characters’ personalities, with analyzing the expressions used by girl characters in an actual anime. According to the result of analysis, some characters were observed which were not corresponded to the definition in two points of 1) virtuality of the expressions and 2) proof of presence of the figure in the reality.

#### 1. はじめに

アニメやマンガ、ドラマ等のヴァーチャルな世界を描いた作品の中では、多くのキャラクター特有の言語表現が登場する。金水（2003）は、特定のキャラクターと結びついた言語表現を、「ある特定の言葉遣い（語彙・語法・言い回し・イントネーション等）を聞くと特定の人物像（年齢、性別、職業、階層、時代、容姿・風貌、性格等）を思い浮かべることができるとき、あるいはある特定の人物像を提示されると、その人物がいかにも使用しそうな言葉遣いを思い浮かべることができるとき、その言葉遣いを『役割語』と呼ぶ」と定義している。そして、金水をはじめ、役割語の例として多く提示されるのが、「～じゃ」のような「博士語」や「～ですわ」のような「お嬢様言葉」といった、社会的属性から想起される言語表現である。西田（2010）は、金水のいう役割語とは「その喚起されるものが博士のようなトータルな人物像そのもの」であり、「社会的地位とも認識される役割に類する」人物像が喚起される場合を指すと解釈し、「キャラクターの性格的属性などの人物の部分的な属性をしめす言語表現を『属性表現』」と定義している。西田の定義では、「性格的属性が人物像を想起させるようなキャラクターの使用する言語表現は、社会的な属性をベースにした役割語とは、その言語表現の機能が相違する」とされ、両者とも「人物像と言語表現とを関連づけ

るといふ基本のところでは、同一の基盤にある」とした上で、役割語と「属性表現」との関係性を説明している。

本稿では、金水（2003）の役割語の定義をベースとして、西田の提唱する「属性表現」の定義について、アニメ『魔法少女まどか☆マギカ』の女性登場人物の言語表現を例として、検証するものである。

## 2. 先行研究

### 2.1 役割語と「属性表現」の定義

アニメや漫画などのヴァーチャル作品では、キャラクターによって使用する言語表現が異なる。金水（2003）は、それらの言語表現を役割語と名付け、定義している。繰り返しになるが、金水の役割語の定義は以下の通りである。

ある特定の言葉遣い（語彙・語法・言い回し・イントネーション等）を聞くと特定の人物像（年齢、性別、職業、階層、時代、容姿・風貌、性格等）を思い浮かべることができるとき、あるいはある特定の人物像を提示されると、その人物がいかにも使用しそうな言葉遣いを思い浮かべることができるとき、その言葉遣いを「役割語」と呼ぶ。

（金水 2003、p.205）

一方、西田（2010）は、「属性表現」という分類を提唱している。「属性表現」と役割語は、「特定の言語表現が特定の人物像を喚起させるところは同様である」とし、両者は「共通の基盤にあるもの」とした上で、以下のように「属性表現」を定義づけている。

- a 現実の世界でおこなわれる表現とは直接的にむすびつかないというヴァーチャル性をもつ。
- b 特定の言語表現とさししめす人物像とに関連性がある。
- c 言語表現のさししめすのは人物の全体像ではなく部分的な属性である。
- d 言語表現のさししめす属性は現実の世界における存在の裏づけがない。
- e 「属性表現」の使用されるキャラクターには性格の統一性がなくキャラクターの破綻ともとれるような例がある。
- f 「属性表現」は一般的にはしられているものではないもののその属性自体が社会的な地位や職業として認識されることで役割語となる可能性がある。

（西田 2010、p.9）

a と b は役割語との共通点、c と d は相違点、そして、e と f は「属性表現」の持つ性質であるとしている。

次項以下、西田の主張する両者の共通点と相違点、そして「属性表現」の持つ性質についてまとめてみる。

## 2.2 役割語と「属性表現」の共通点—特定の人物像との結びつきとヴァーチャル性

西田 (2010) は、マンガやアニメ、ゲーム、ライトノベル等に登場するツンデレ<sup>1</sup>キャラクターを例に挙げ、「属性表現」の定義を導き出しているが、ツンデレ表現が『特定の人物像』と『言葉づかい』が対応している点では、役割語と類似したもの<sup>2</sup>であるとした上で、「属性表現」のヴァーチャル性について述べている。西田によると、ツンデレキャラクターはマンガやアニメ等の世界では市民権を得た存在であるとしているが、その言語表現は現実社会でリアルに使用され、受け入れられているものとはいえないとしている。西田は、インターネット上で見られる、「現実世界でツンデレキャラクターがいたら引いてしまう」「現実世界の美人でもない人物がツンデレ表現を使用すると気持ちが悪い」といったコメントを取り上げ、「ツンデレのセリフは、ヴァーチャルなフィクションの世界ではうけいれられるものの、現実の世界においては、うけいれがたいものである」としている。

一方、役割語においても、同様の点が挙げられている。清水 (2000) は、小説において上司が部下に仕事を頼む際に役割語として現れる上司語(「～してくれたまえ」等)を、実際の社会において使用する上司はいないとしている。また、金水 (2003) でも、博士語や老人語を実際に使用している博士や老人は、現実には存在しないとしている。西田 (2010) は、金水 (2009) の「記述されたり、描かれた世界 (さらに言えば、認識・解釈された世界) は“仮想現実”であり、現実の似姿であっても現実そのものと等価ではない」との指摘を挙げて、「役割語もツンデレ表現もヴァーチャルなフィクションの世界での存在であり、(中略) 共通する性質をもつものである」としている。

このように、役割語と「属性表現」とでは、ある特定の言語表現が特定の人物像と結びついている点、そしてそれらの言語表現はあくまでヴァーチャルな世界に現れるものであり、現実世界ではそれらの表現が用いられることはない (あるいはほとんどない) 点において、共通であるとされている。

## 2.3 役割語と「属性表現」の相違点

### 2.3.1 言語表現のしめす属性

西田 (2010) は、金水 (2003) の役割語の定義における「人物像」の事例を、以下のように分類し、キャラクターの持つ属性を社会的属性と性格的属性とに分けている。

言葉遣いから想起される「人物像」

社会的属性：年齢、職業、階層

性格的属性：性格

なお、金水 (2003) では、さらに「容姿」「風貌」も「人物像」の例にあげるが、これは社会的属性と性格的属性の両者にかかわるものである。

(西田 2010、p.3)

また、金水 (2009) では、「ステレオタイプに基づく役割語のマトリックス」として、

社会的な属性に関わる要素の整理をしているが、西田 (2010) は、以下の部分を挙げ、性格的な属性については、これらのように整理、把握することは不可能であるとしている。

	男	女
老年	老人語	おばあさん語
* 青年・壮年	男ことば	女ことば
(上流)	上司語	お嬢様・奥様語
子供	少年語	少女語
幼児	幼児語	

\* 教養・階層・ジェンダーの細分等でさらに細かい区分あり

さらに<軍隊語><店員語>など、職業にまつわる場面依存的な役割語もある。

(西田、2010)

確かに、金水 (2003) の定義では、キャラクターの言語表現を決定する要素として性格も含まれているが、上記の整理では、年齢、性別、階層や職業が、その決定要素としてまとめられている。また、役割語の例として多く挙げられる言語表現が、老人語やお嬢様言葉など、社会における属性と結びついた言語表現であることから、役割語という場合には、その社会的属性が主な判断要素となっている。西田 (2010) は、性格的属性を表す言語表現は、上記のような社会的属性の分類のように整理することは不可能であるとし、「性格的属性が人物像を想起させるようなキャラクターの使用する言語表現は、社会的な属性をベースにした役割語とは、その言語表現の機能が相違する」としている。この機能については、次項で詳しく触れる。よって、西田の定義では、社会的属性に起因する言語表現は役割語、性格的属性のそれは「属性表現」であると分類されている。そして、それは言い換えれば、キャラクターの性格的属性は人物な部分的な属性であり、「その喚起させるものが博士のようなトータルな人物像そのものなのか、それとも、キャラクターにおける部分的な要素である属性なのかという点で相違する」ということになる (西田、2010)。

### 2.3.2 現実世界での存在の裏付け

西田は、『今日の5の2<sup>2</sup>』というマンガに登場する5人の少女キャラクターの描き分けとその中に登場する「ボクッ娘<sup>3</sup>」を例に挙げ、言語表現がしめす属性を持つキャラクターの現実の世界での存在の有無について述べている。金水の定義する役割語に分類される博士語や老人語、お嬢様語などの場合は、現実の社会においても、博士、老人、お嬢様 (上流階級の若い女性) といった人物が実際に存在する。それに対し、西田が「属性表現」であるとしているツンデレキャラクターやボクッ娘は、実際には、一般に広く認識されている人物像ではない、という。したがって、「社会的属性による役割語のばあいには、そのキャラクターの人物像をより明瞭にしめすためのものであるのに対して、性格的属性による言語表現のばあいは、そのキャラクターを作品世界

においてえがきわけけるためのものである」としている（西田、2010）。つまり、社会的属性によって言語表現が想起される役割語においては、現実世界にも存在する人物像と結びついているため、キャラクターをより明瞭に受け手にイメージさせるという機能があるが、「属性表現」においては、その言語表現が結びつく人物像が現実世界での存在に即結びつくものではないため、キャラクターを明瞭にイメージさせるためではなく、「仮想世界」においてキャラクターの特徴を明確にし、それらを描き分けるために使用されている、ということである。言い換えれば、役割語の場合は、その言語表現から想起される人物像が現実のものであるため、キャラクターが提示された時点で「いかにもその人物らしい表現」を予測したり想起したりされることが期待されている。一方、「属性表現」の場合には、そのキャラクターがその言語表現を使用することによって初めてキャラクターの位置付けや役割が理解される。従って、役割語のような社会における常識的な理解ではなく、仮想のフィクションの世界での表現効果が重視されているといえるのである。このように、特定の言語表現から想起される人物像、キャラクターの現実世界での存在の有無という点で、役割語と「属性表現」とでは異なっているとされているのである。

## 2.4 「属性表現」の特徴

### 2.4.1 キャラクターの破綻

前述のように、西田（2010）では、フィクションの世界において、現実世界では存在しえないようなキャラクターづけ、性格づけが行われることがあるとしているが、定延（2009）の「キャラクターの破綻」という観点を引用し、フィクションの世界において、「急にキャラクターの印象がかわってしまうことや、わざとらしく演出されたキャラクターについては、違和感のもたれることがある」としている。定延では、キャラクターが元々の性格とは合っていない行動や態度を示す例や、わざとらしく演出され、いかにも意図的にキャラクターづけをされたことが明白なキャラクターを指して、「キャラクターの破綻」と説明している。例えば、普段乱暴なキャラクターがふいに優しさを見せる、あるいは「キザ」「ぶりっ子」「おかま」などのキャラクターがそれに含まれる。西田は、「ツンデレ」と「ボクッ娘」の言語表現においても同様であるとし、「属性表現」ではキャラクターの破綻が起こっている例が見られるとしている。

### 2.4.2 「属性表現」が役割語となる可能性

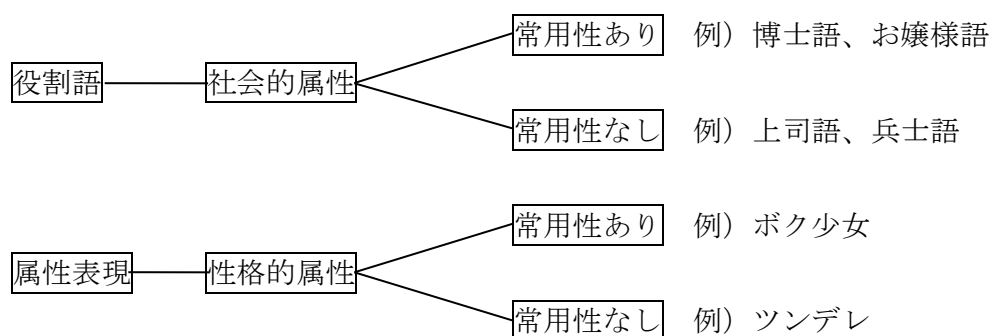
西田（2010）は、性格的属性と結びつく「属性表現」が、社会的属性と結びつく役割語への変わる可能性について、メイド言葉を例として説明している。メイド言葉とは、メイド喫茶で使用される「ご主人様」「お帰りなさいませ」等の表現を指すが、元々はマンガやアニメなどのフィクションの世界における架空の存在であった。しかし、現実にメイド喫茶が秋葉原などに登場し、それが一般にも広く知られるようになったことで、「メイド喫茶でメイド役として働く女性＝メイド」が職業として認知されるようになってきている。ここでのメイドを職業と考えるのであれば、それは社会的属性ということになり、つまりはメイド言葉は役割語と位置づけられる可能性がある。西

田は、メイドのことばを「役割語に準ずるもの」としており、つまり、「社会的にみとめられた地位や職業である役割をもっているのかどうか、判断の基準になる」としているのである。

## 2.5 言語表現の常用性

さて、西田（2012）は、「ボク少女（ボクッ娘）」の言語表現を分析し、「属性表現」の常用性について指摘している。「ボク少女」というのは、一人称に「ボク」を使用する少女キャラクターを指すが、そのキャラクターに特有の言語表現が、常に変わることなく使われる一人称であることから、常用性のある「属性表現」であるとしている。これは、役割語に含まれる博士語やお嬢様語などと、キャラクターの一貫した人間像を表しているという点で同様であるといえる。これは、場面によって「ツンツン」と「デレデレ」を使い分ける「ツンデレ」キャラクターとは、常用性と言う点で異なっており、また、博士やお嬢様に対しての上司語や兵士語との相違点と同様であるとしている。つまり、常用性があるということは、『スタイルシフト』の必要がないということでもあるのである（西田、2012）。これらを表にまとめると、以下のようになる。

図1 西田の考える役割語と「属性表現」の常用性



以上みてきたように、西田（2010、2012）の提唱する「属性表現」では、ある言語表現が特定の人物像と結びついており、また、それらいずれの言語表現も現実世界では使用が認知されていないという点で、役割語とは同一基盤上にあるとした上で、1) 役割語が社会的属性に起因しているのに対し、性格的属性に帰属している、2) キャラクターの全体像ではなく部分的な属性を表す、3) その言語表現から想起される属性は現実世界では存在の裏付けがない、という点から、役割語とは分けて認識されるべきであるとしている。

ここからは、実際のアニメ作品を例にとり、「属性表現」の定義を検証していくこととする。

## 3. 『魔法少女まどか☆マギカ』

本稿では、「属性表現」の定義の検証材料として、アニメ『魔法少女まどか☆マギカ』

を採用し、そこに登場する少女キャラクターの言語表現を分析することとする。本アニメを使用する理由は、特徴のある言語表現をする少女キャラクターが複数名登場し、また、そのキャラクターの全てが社会的属性においては「中学生（あるいは同年代の少女）」という共通する背景を持っていることから、かれらの性格的属性と結びついた言語表現を比較するのに適していると判断したためである。

### 3.1 アニメの概要

『魔法少女まどか☆マギカ』は、2011年1月から4月まで、毎日放送ほかで、全12話で放送された日本のオリジナルテレビアニメ作品である。テレビシリーズの放送後、『[前編]魔法少女まどか☆マギカ 始まりの物語』(2012年10月6日公開)、『[後編]魔法少女まどか☆マギカ 永遠の物語』(2012年10月13日公開)、『[新編]魔法少女まどか☆マギカ 叛逆の物語』(2013年10月26日公開)の劇場版3作品が公開されている。このうち、前編と後編は、テレビシリーズを再編集して前後編として発表したものであり、その後の世界を描いた完全新作の劇場版が新編である。新編では、10月26日の公開から3週間後の11月15日には観客動員数が100万人を突破しており、人気の高さが窺える。緻密で重厚なストーリー設定と可愛らしいキャラクターデザインとのギャップが話題となり、また、魔法少女の敵となる「魔女<sup>4</sup>」のデザインや戦いの場となる異空間のデザインが独特で「メルヘンホラー」と呼ばれる独自の世界観により、人気を博している。2011年には第15回文化庁メディア芸術祭アニメーション部門で大賞、2012年には第11回東京アニメアワードテレビ部門優秀作品賞を受賞しており、テレビシリーズの内容を元にしたコミカライズ、ノベライズ、世界設定を共有した外伝漫画作品、PSPでのゲーム化なども展開されている。

### 3.2 ストーリー

本アニメは、見滝原(みたきはら)という架空の町を舞台に、願いを叶えた代償として魔法少女となり、人知れず人類の敵(魔女)と戦うことになった少女たちに降りかかる過酷な運命を、優れた魔法少女となれる可能性を持ちながらも傍観者として関わることになった中学生・鹿目(かなめ)まどかを中心に描いた作品である。作中には魔法少女と魔女が存在し、これらの存在は一般には知られていないが、有史以前から世界中に多くの魔法少女が人知れず存在し、歴史を動かしてきたとされている。また、魔女の標的となった人間は原因不明の自殺や殺人を引き起こしているとされ、その魔女と戦う魔法少女たちを軸に物語は展開されている。「魔法少女」とは、インキュベーター<sup>5</sup>と呼ばれる生物と、願い事を1つ叶えてもらう代わりに契約を結び、魔法が使えるようになった少女のことをいう。魔法少女は魔法の源となるソウルジェムと呼ばれる宝石を持っており、魔法を使うごとに濁っていくソウルジェムを浄化するためには、魔女が孕んでいるグリーンシードという宝石状の物質が必要であり、グリーンシードは魔女を倒すことで手に入れることができる、という設定である。

### 3.3 登場人物

本稿では、『魔法少女まどか☆マギカ』に登場する少女キャラクターに焦点を当て、その言語表現を観察、比較する。アニメに登場する少女キャラクターとその特徴は以下の通りである。なお、この作品は、時間軸を繰り返す、というストーリー設定により、テレビシリーズと新編とでは、キャラクターの立場や役割が異なっているが、ここで挙げた特徴は、テレビシリーズでベースとなっているものである（ただし、外見や服装に変化はない）。また、本稿で引用する登場人物のせりふは、テレビシリーズを再編集した劇場版2作品のうち、『[前編] 魔法少女まどか☆マギカ 始まりの物語』から抜粋したものである。

表1 女性キャラクターの特徴

名前	特徴等	
鹿目まどか (かなめまどか)	性格等	見滝原中学の2年生。平凡で目立つタイプではないが、魔法少女の華やかさや魔女と戦う姿に憧れを抱く。本作の主人公。家族構成は父、母、弟。はっきり発言することが苦手で、言い淀んだり、最後まで文を言いきらないことが多いが、大事な場面では言いたいことをしっかり伝えようとする一面もある。心優しく、友達思い。
暁美ほむら (あけみほむら)	性格等	まどかのクラスに来た転校生。まどかとは初対面のはずだが、既にまどかを知っており、まどかが魔法少女になることを阻止しようとする。学業、運動、容姿に優れており、常に冷静。人を寄せ付けない雰囲気を持ち、単独で行動する。物静かで、必要なこと以外は話さない。また、感情を表すことが少なく、淡々とした話し方をする。
美樹さやか (みきさやか)	性格等	まどかのクラスメイト。明るく活発な性格。作中に現れる親友のまどかの評価では、思いこみが激しいが、優しくて勇気がある、とされている。
巴マミ (ともえまみ)	性格等	まどか、ほむら、さやかの中学校の先輩。胸が大きく、女性的な外見、話し方のキャラクターで、「お姉さん」としての役割を担っている。魔法少女としても、まどか、さやかの先輩に当たり、2人に魔法少女について伝授するため、2人に対するときには先輩らしく、教える口調になることが多い。
佐倉杏子 (さくらきょうこ)	性格等	他の街から移ってきた魔法少女。学校には通っていない。常に何かを食べている。自分の父が、自分のせいで家族と無理心中したという過去を持ち、その境遇のせいか他人を信用せず、魔法は自分だけのために使う



		べきだという信念を持っている。気が強く好戦的で、言葉遣いも男勝りなため、粗暴で利己的な印象を与える。
志筑仁美 (しづきひとみ)	性格等	まどか、さやか、ほむらのクラスメイト。まどか、さやかとは仲が良く、一緒に行動することが多い。ピアノ、日本舞踊、茶道を習うお嬢様で、まどかやさやかに対しても敬語を使うなど、丁寧な言葉遣いをする。穏やかでおとした性格。

上記一覧に示した通り、6人中魔法少女は、まどか、ほむら、さやか、マミ、杏子の5人であり、仁美はサブキャラクターである。『まどか☆マギカ』では、登場人物が少なく、主な少女キャラクターは上記6名であるが、キャラクターづけのため、その言語表現は明確に描き分けられており、非常に特徴的である。

### 3.4 言語表現の特徴

#### 3.4.1 鹿目まどか

主人公である鹿目まどかは、平凡で目立たず、自分は自慢できることが何もなく、人の役にも立てず、迷惑ばかりかけていくのではないかと自己評価をしているような少女である。言語表現では、自ら積極的に発言することは少なく、主人公にしては、発言量は多くない。そして、日常会話の場面では、言い淀みや言いさしが多く、自分の意見をはっきりとは言わない印象のあるキャラクターである。また、まとまった長い文を話すことも少ない。

(1) (暁美ほむらに保健係であることを言い当てられた場面)

まどか：あ、あの、その、私が保健係ってどうして・・・

(2) (美樹さやか、志筑仁美との会話)

まどか：あのね、ゆうべあの子と夢の中で会った、ような・・・

(3) (暁美ほむらに魔法少女になることを止められた場面)

まどか：ほ、ほむらちゃん！あ、あの、あなたはどんな願い事をして魔法少女になったの？

(4) (攻撃されたキュゥベエを庇う場面)

まどか：だ、だって、この子、怪我してる。だ、だめだよ、ひどいことしないで。

ストーリーが進み、魔法少女の戦いに巻き込まれ、事態が緊迫していくと、徐々にはっきりと意見を言うような場面も現れるが、まどかがベースとして持っている人物像とは、以上のような言語表現からも、自信がなく、気の弱い大人しい性格であるこ

とがわかる。つまり、まどかの話し方から、「気の弱い大人しい少女」という人物像を想起することができるのである。従って、まどかの社会的属性は中学生であるが、その言語表現は性格的属性と結びついていることがわかる。

### 3.4.2 美樹さやかと佐倉杏子

美樹さやかと佐倉杏子はいずれも魔法少女となるが、魔法少女としては佐倉杏子の方が先輩である。杏子は実戦経験も豊富で、ストーリーの初めは新人として町を守ることになったさやかに突っかかり、その縄張りを奪おうとするなど、同士である魔法少女を傷つけることも厭わない、強気で好戦的なキャラクターである。一方、さやかは主人公のまどかと同級生で、親友であり、魔法少女になるまではごく一般的な中学生である。なお、テレビシリーズでは杏子は中学校には通っていない設定で、年齢も不明であるが、その外見や態度、また魔法少女として活躍していることから、他の少女キャラクターと同年代であると考えられる。

2人の言語表現であるが、いずれも男ことばを使用する。以下、例を挙げる。

#### (5) (教師の発言に対して)

さやか：そっちが後回しかよ。

#### (6) (ケーキを食べて)

さやか：うん、めっちゃうまっすよ。

#### (7) (魔女の異世界で)

さやか：うわぁ、来んな、来んな！

マミ：どう？怖い？2人とも。

さやか：なんてことねーって！

#### (8) (さやか、ほむらとの戦闘にて)

杏子：チャラチャラ踊ってんじゃねーよ、ウスノロ！

杏子：妙なワザを使いやがる。

#### (9) (魔法少女の秘密を聞いた場面)

杏子：テメエは・・・何てことを・・・！ふざけんじゃねえ！

上記の抜粋部分を見ると、どちらのキャラクターも男ことばを使用していることがわかる。

さやかは、活発で明るく、ハキハキと自分の意見を言う少女である。上記のような男ことばを使用するが、常に荒っぽい話し方をするわけではなく、「男っぽい」というよりも「女性的ではない」と表現すべきキャラクターである。また、「萌え」「キャラづけ」などの言葉を使い、ややオタクっぽい話し方をすることもあり、日常会話では、

ややコミカルに話すこともある。

一方の杏子は、作中を通して常に乱暴な言葉遣いをするキャラクターである。杏子は、自分が魔法少女になったことが原因で家族を失うという暗い過去を背負っており、そのことから、他者を信用せず、魔法は自分のためだけに使う、というスタイルを貫いている。そのため、他者に対してきつい言い方をしたり、乱暴な言葉を使うことが多い。また、さやかも杏子も1人称は「あたし」であるが、2人称においては、さやかは「あんた」を使うのに対して、杏子は「あんた」「お前」「てめえ」などを使っている。

さやかの社会的属性は、まどか同様「中学生」であり、杏子のそれは「学校に行っていない中学生ぐらいの年代の少女」であると言えるだろう。中学生ぐらいの少女だから男ことばを使用する、あるいは男ことばを使う少女だから中学生だろう、という想起は成り立たず、ここでは、少年のような、あるいは荒っぽい男性のような言語表現をすることで、かれらの性格を想起させることが狙いである。従って、彼らの話し方が、その社会的属性と直結しているのではなく、性格的属性を示していることがわかる。

### 3.4.3 巴マミと暁美ほむら

巴マミと暁美ほむらは、いずれも女性的な話し方をするキャラクターである。

#### (10) (まどかとさやかを魔女から救う場面)

マミ：危なかったわね。

#### (11) (魔女との戦闘中)

マミ：大丈夫、負けるもんですか！

#### (12) (マミとほむらとの会話)

ほむら：その2人の安全は保障するわ。

マミ：信用すると思って？

#### (13) (まどかとほむらの会話)

ほむら：あなたは自分を責めすぎているわ。

まどか：え？

ほむら：あなたを非難できるものなんて誰もいない。いたら、わたしが許さない。

忠告、聞き入れてくれたのね。

まどか：うん・・・。

まどか：わたしがもっとはやくにほむらちゃんの言うことを聞いていたら・・・

ほむら：それで巴マミの運命が変わったわけじゃないわ。でも、あなたの運命は変えられた。1人が救われただけで、わたしはうれしい。

上記の例を見ても、2人とも「～わ」のような女性的な話し方をしていることがわかる。マミについては、常に女性的な話し方をし、まどか、さやかの先輩（中学校でも、魔法少女としても）であることから、「お姉さんキャラクター」という役割を担い、また、年上らしく、後輩を諭すような話し方をすることが多い。一方のほむらも、基本的には女性的な話し方をするが、終助詞を使わず、事務的な話し方をすることが多い（(13)）。これは、ほむらの持つ謎の部分、正体を隠そうとする姿と関連があると思われる。

マミの社会的属性は「中学生」であり、「先輩」であるが、胸が大きい、フリルのついたスカート等の女性的な服装が示す女性的な外見と相まって、その話し方からは「女性的な性格、お姉さんらしい」という性格的属性を感じ取ることができる。それに対してほむらは、女性的な話し方はしているが、事務的に言い切る台詞が多いことにより、感情を隠そうとしていると考えられることから、謎を含むキャラクターというものと結びついているといえる。

#### 3.4.4 志筑仁美

仁美は、まどか、さやかの同級生で、親友であるが、他の5人と違い、魔女や魔法少女の存在は知らず、魔法少女になることもない。作品中のまどか、さやかとの会話で、

(14)仁美：あら、もうこんな時間？ごめんなさい、お先に失礼しますわ。

さやか：今日はピアノ？日本舞踊？

仁美：お茶のお稽古ですの。もうすぐ受験だったというのに、いつまで続けさせられるのか。

さやか：わあ、小市民に生まれてよかった。

という台詞があり、お嬢様であることが示されている。仁美は、親友のまどかやさやかと話す際にも、常に丁寧語を使用し、名前を呼ぶときには苗字に「さん」を付けることもある。また、その言語表現は、典型的なお嬢様言葉である。

(15)（まどかに対して）

仁美：まどかさん、本当に暁美さんとは初対面ですか？

(16)（まどかとの会話）

仁美：あら、鹿目さん、ごきげんよう。

まどか：ねえ、どうしちゃったの？ねえ、どこへ行こうとしてたの？

仁美：どこって、それは・・・ここよりも、ずっといい場所、ですわ。

まどか：仁美ちゃん。

仁美：ああ、そうだ、鹿目さんもぜひ一緒に。ええ、そうですわ、それがすばらしいですわ。

このように、「ごきげんよう」という表現や、丁寧語に女性ことばの「～わ」を付けるなど、典型的なお嬢様キャラクターであることがわかる。性格は穏やかでおっとりしている。

#### 4. 検証結果—登場人物の言語表現の分類

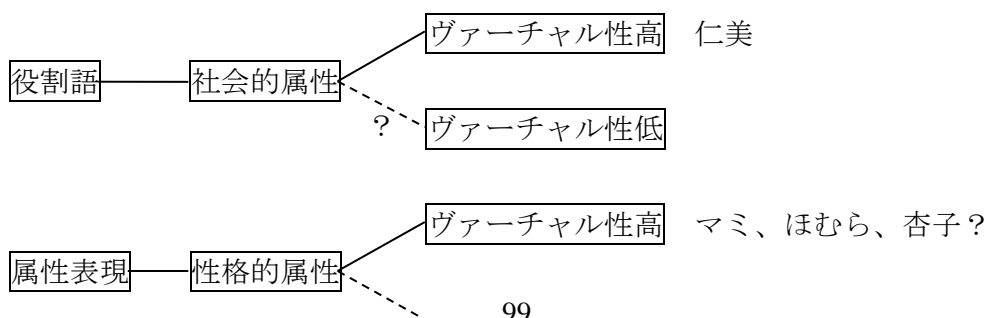
では、以上の登場人物たちの言語表現を、役割語と「属性表現」の定義と照らし合わせて、分類してみる。

まず、仁美であるが、これは典型的なお嬢様言葉を使用しており、その社会的属性と合致している。一方、性格的属性については、「おっとりとした穏やかな性格」は言語表現と直接関連があるものではない。また、現実世界においてこのようなお嬢様言葉を使用する人物はいないだろうと考えられるため、ヴァーチャル性は高いと思われる。従って、役割語の定義に当てはまる。

では、他の5人についてはどうだろうか。まず、言語表現のしめす属性であるが、いずれにおいても性格的属性と言語表現とが結びついており、その話し方から彼らの性格を想起することができる。その点については「属性表現」の定義に当てはまると言える。

では、次にヴァーチャル性についてみる。マミやほむらが使用する女性的な話し方は、現実の世界において、よく聞かれるものであるだろうか。かれらの世代の若い少女たちで「～だわ」などの表現を使っている人物は、現実的にはあまりいないのではないだろうか。そのような表現を使用していたら、むしろ不自然な印象を与えるだろう。従って、マミとほむらの言語表現も、ヴァーチャル性が高いといえるだろう。つまり、「属性表現」の定義と合致しているといえる。しかし、まどかのような言い淀みや言いさし、あるいはさやか、杏子のように男ことばを使用する少女は、現実にも存在するのではないだろうか。確かに杏子の言語表現は極端に男性的なので、そこまで徹底した男ことばを使用する少女は現実には少ないかもしれないが、少なくともまどかやさやかのような話し方をする少女は現実には存在するだろう。だとすれば、まどかやさやかの言語表現は、ヴァーチャル性が低く、また、現実世界での存在の裏付けもあるといえる。これらの特徴を踏まえ、6人の登場人物の言語表現を分類すると、図2のようになる。

図2 登場人物の言語表現の位置づけ



ヴァーチャル性低 まどか、さやか、杏子？

これらの結果から、役割語と「属性表現」の定義について、検討してみる。

まず、いずれのキャラクターの言語表現も、彼らの人物像（全体であれ、部分的であれ）と結びついており、視聴者はこれを頼りにその人物像を想像したり思い浮かべたりすることができる。したがって、役割語、「属性表現」の「特定の言語表現が特定の人物像を喚起させる」（西田、2010）という点においては、定義に当てはまる。

次に、言語表現が結びついているキャラクターの属性については、社会的属性により人物の全体像を現すとする役割語、そして、性格属性という人物の部分的な側面を示す「属性表現」のいずれもが確認された。マミ／ほむら、まどか／さやか／杏子の言語表現は、彼らの性格や背景、他キャラクターとの関係性を表しており、人物像全体を示すものだといえない。この点で、西田の提唱する「属性表現」の定義に当てはまるといえる。

一方、ヴァーチャル性については、定義にそぐわない言語表現が見られた。役割語でも「属性表現」でも、そのヴァーチャル性は高く、現実の世界ではそのような言語表現は見られない、あるいは観察しにくいとされているが、今回の結果では、まどか、さやか（杏子については断言できない）のように、現実でも存在が思い浮かぶ言語表現を用いるキャラクターが確認された。まどかやさやかの言語表現は、その話し方や言い回しから、彼らの「大人しく気が弱い」、「明るく活発」といった性格が想起できるが、ヴァーチャル性は低いということから、「属性表現」の定義には、部分的にしか当てはまらないといえるだろう。

また、現実世界での存在の裏づけ、と考えた場合には、仁美の社会的属性である「お嬢様」という存在は、現実世界でも存在しているといえる。しかし、まどかのような「気が弱く、言い淀んだり、最後まで言い切らない少女」や、さやかのよう「少年のような言葉づかいをする、さばさばした明るく快活な少女」という人物も、現実に存在すると考えられる。そのため、性格的属性と人物像とが結びついている「属性表現」ではあるが、現実世界での存在の裏付けもあるといえる。

以上をまとめると、言語表現が人物像を想起させる、社会的属性／性格的属性と結びつく言語表現、人物の全体像／部分的側面を想起させる言語表現、という点においては、役割語、「属性表現」、あるいはその両方の定義が適用できるが、ヴァーチャル性、現実での存在の裏づけという2点においては、両定義には当てはまらない事例も見られた。

また、今回検証対象としたアニメでは確認されなかったが、役割語についても、社会的属性をしめし、かつヴァーチャル性の低い言語表現が存在するのではないかとこの点についても、さらなる検証が必要であるといえる（図2、?部分）。

## 5. まとめ

西田の提唱する「属性表現」という分類については、人物像と言語表現の関わりを広く定義している役割語を細分化して捉えることで、役割語では中心的に扱われてい

ない性格的属性という要素を抽出し、定義した点において高く評価できる。これまでの役割語研究の分野においては、社会的属性に主眼が置かれ、多様化するキャラクター特有の言語表現を完全には網羅できていなかった。しかし、「属性表現」という性格的属性に注目した分類が提示されたことにより、広くその言語表現とキャラクターの繋がりを整理し、分析していく足がかりとなるといえるだろう。しかし、西田の定義では、現実世界での存在の裏づけがない、という制限をつけてしまったため、性格的属性と結びついた言語表現の一部が、そこからこぼれてしまうという問題が生まれている。また、役割語、「属性表現」の双方において、それらの言語表現はヴァーチャル性が高いとされているが、その点についても、再検討が必要であると思われる。

今後は、さらに多くのキャラクターと言語表現との繋がりを調査し、検討する必要があるだろう。また、現実世界でのそれら言語表現やその使用者、人物像などについても調査する必要がある。さらには、その現実世界での言語表現と人物像との繋がりが、そもそもの存在であるのか、あるいはアニメ等のフィクション作品から伝播したものであるのか、という点も合わせて考える必要がある。つまり、現実世界での言語表現がフィクション世界に持ち込まれたのか、あるいは、フィクション作品の影響により、それらの言語表現が現実世界でも使われるようになったのか、ということである。今後の検討課題としたい。

## 注

- 1 いつもはツンツンしているのに、2人になるとデレデレしちゃう。または、付き合う前はツンツンだが、仲が深まるとデレデレになってしまう状態（萌え用語選定委員会 2005、p.87）。
- 2 桜庭コハルによるマンガ作品（講談社）。
- 3 ボク少女ともいう。1人称に「ボク」を使用する少女のキャラクターを指す（西田2012、p.13）。
- 4 「結界」と呼ばれる普通の人間には見えない異世界から「使い魔」と呼ばれる僕とともに現れる化物。
- 5 足歩行の地球外生命。作中ではキュウベエという名前では呼ばれている。

## 参考文献

- 金水敏(2003). 『ヴァーチャル日本語 役割語の謎』.岩波書店
- 金水敏(2007). 『役割語研究の地平』.くろしお出版
- 金水敏(2011). 『役割語研究の展開』.くろしお書店
- 金水敏(2011). 「役割語と日本語教育」.『日本語教育』150号.日本語教育学会
- 定延利之(2009). 「キャラクタは文法を変えるか?」.シンポジウム「役割・キャラクター・言語」発表資料（2009.3.29 神戸大学）
- 西田隆政(2009). 「ツンデレ表現の待遇性—接続助詞カラによる「言いさし」の表現を中心に—」.『甲南女子大学研究紀要』第45号, 15-23

西田隆政(2010). 「「属性表現」をめぐって—ツンデレ表現と役割語の相違点を中心に—」. 『甲南女子大学研究紀要』第46号, 1-9

西田隆政(2012). 「「ボク少女」の言語表現—常用性のある「属性表現」と役割語との接点—」. 『甲南女子大学研究紀要』第48号, 13-22

参考サイト (2013年11月28日検索)

ピクシブ百科事典 「暁美ほむら」

<http://dic.pixiv.net/a/%E6%9A%81%E7%BE%8E%E3%81%BB%E3%82%80%E3%82%89>

ピクシブ百科事典 「鹿目まどか」

<http://dic.pixiv.net/a/%E9%B9%BF%E7%9B%AE%E3%81%BE%E3%81%A9%E3%81%8B>

ピクシブ百科事典 「佐倉杏子」

<http://dic.pixiv.net/a/%E4%BD%90%E5%80%89%E6%9D%8F%E5%AD%90>

ピクシブ百科事典 「志筑仁美」

<http://dic.pixiv.net/a/%E5%BF%97%E7%AD%91%E4%BB%81%E7%BE%8E>

ピクシブ百科事典 「巴まみ」

<http://dic.pixiv.net/a/%E5%B7%B4%E3%83%9E%E3%83%9F>

ピクシブ百科事典 「美樹さやか」

<http://dic.pixiv.net/a/%E7%BE%8E%E6%A8%B9%E3%81%95%E3%82%84%E3%81%8B>

wikipedia 「魔法少女まどか☆マギカ」

<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E9%AD%94%E6%B3%95%E5%B0%91%E5%A5%B3%E3%81%BE%E3%81%A9%E3%81%8B%E2%98%86%E3%83%9E%E3%82%AE%E3%82%AB>